

新著紹介

近世に於ける「我」の自覺史

文學博士 朝永三十郎著

「我」の自覺史は單なる「吾」の自覺史ではない。「我」の發見は凡ゆる外的權威——例へば習俗の教權とか、社會的政權とか更には自然科學的理論主義の權威とかに對する反動に起因するが、見出されたる「我」の深刻なる内省に出でざる限り、「我」の自覺は遂に膚淺なる「吾」の覺醒に終らざるを得ない。超個人我と自律我との發見に眞なる「我」の自覺が始まるものとすれば著者の眞意がカント以後の「我」の自覺史にあることも明であらう。カントによつて發見せられたる「我」がヘーゲルに至つて形而上學的實在化をうけ一旦自然科學的唯物論によつて阻止せられ更に新理想主義の復興となる發展の徑路はやがて著者の言ふ、精神必然的、自然必然的及目的觀批判的の三大區分に外ならぬ。本書の目圖するところも第一編に於いて叙述せられたる思想の變遷——「我」といふ概念を中心とした——に、第二篇に於て明確なる學的基礎を與へんとするにあると思ふ。殊に最後の節に於て理論的形而上學說の難點を批判的立場から解明し、理想主義と新理想主義との異別を明説することによつて著者の根柢に横はる批判的思想を見ることは吾々の大なる喜びである。

然しながら本書の目的は、單に「我」の思想の變遷と三様の考へ

方との學的論究を以て終るものではない。著者の考へから言つても哲學の二要件は嚴密に學的であると言ふ事と、人生に對して指導の力を有する事とでなければならぬ新理想主義の背景といふ副名はやがて後者の企圖を寓したものではなからうか。そして「我」の自覺史は同時に「吾」の自覺史ではないであらうか。哲學史家の常套語を更に踏襲して近世思想の發展と希臘に思想の開展との間に顯著なる並行があると言ふならば、近代思想を過去五十年の短日月に縮刷して繰返した觀のある吾が明治思想史は「我」の自覺史によつて教へらるゝ所多からざるを得ないであらう。「我」の自覺史は同時に吾の自覺を促す啓蒙の書でなければならぬ。「我」の自覺史は單なる「吾」の自覺史ではないが、同時に切實なる吾の自覺史でなければならぬ。(寶文館發行定價壹圓貳拾錢。中川得立)

哲學概論 (哲學叢書 第三篇)

文學士 宮本 和吉著

「哲學に對する要求が個人を取つて考へても時代全體を取つて考へても顯著に高まりつゝあることは、現代生活の思想方面に於ける注目すべき事實である。」

これ本書の冒頭に宮本學士が掲げて居る語である。全く其通りで近來、心の溺を癒すべき活水を内觀の世界に求め、哲學研究に志するものが日々に多くなつて來る様であるのは甚だ喜ばしい現象と云はねばならぬ。

かういふ志の人達に分りにくい「哲學上の術語」や又さういふ語